

ポスト講和期の日米文化交流と文学空間 ——ロックフェラー財団創作フェローシップ(Creative Fellowship)を視座に

金 志 映

Summary

While much has been studied about the impact of the GHQ censorship imposed upon Japanese literature during the Occupation, little attention has been paid to the U.S. cultural policy toward the Japanese literary scene after the Occupation. The aim of this paper is to shed light on the Japanese literary scene in the post-peace treaty period as a battlefield of U.S. cultural diplomacy at the time of the Cold War.

Immediately after the Occupation came to the end, the U.S. conducted an extensive cultural interchange program in Japan to strengthen the tie between the people of the two countries and counteract the influence of communism. The Rockefeller Foundation played a leading role in promoting U.S.-Japan cultural relations throughout the 1950s through a wide range of philanthropic activities. In 1953, the Foundation launched a fellowship program named “creative fellowship” to invite Japanese writers to the U.S. Up until 1962, as many as ten Japanese novelists and literary critics stayed up to a year in various parts of the U.S. under this fellowship program. This paper, based on thorough examination of Rockefeller Foundation Archive materials, investigates how and why this program was planned and operated. Although Foundation documents suggest that the program was initiated as a Cold War effort to combat a communist cultural offensive, as well as its affinity with the reorientation program of the Occupation period, it is not proper to simply dismiss it merely as propaganda. The paper explores what this program, conducted with close cooperation on the part of Japan, meant for both the U.S. and Japan in the context of complex domestic and international circumstances of the post-peace treaty period.

はじめに

連合国による占領が終わりを迎えた後、アメリカは日本において大規模な文化交流計画を始動させ、日米文化関係の強化を図った。対日占領の終結を前にしたアメリカには、独立後の日本を親米的な自由世界の同盟国として繋ぎとめるには、政治・経済と並んで緊密な文化関係が不可欠であるとの強い認識があった。そこでトルーマン大統領から対日講和締結の下準備を任命されたダレス特使(John Foster Dulles)は、ロックフェラー三世(John D. Rockefeller 3rd)に講和使節団の文化顧問としての協力を要請している。文化面における日米関係の将来について、長期的な観点に立って構想をまとめたロックフェラー報告書¹⁾

¹⁾ United States-Japanese Cultural Relations: Report to Ambassador John Foster Dulles, April 16, 1951, folder 446, box 49, series 1-OMR files, Record Group (hereafter RG) 5, Rockefeller Family

には、占領期の情報・教育政策への評価を踏まえて、講和後に政府と民間によって担われるべき多彩な文化交流案が盛り込まれていた。文化の交流こそは、両国の人々を繋ぐためのなくてはならない基盤と考えられたのである。このような認識のもとに、講和が発効した50年代にアメリカは、政府緒機関や主な民間財団が中心となって、さまざまな日米交流プログラムを実施した。²⁾ 本論考の目的は、講和後に活発化した日米文化交流への文学者の関わりを視座として、ポスト講和期の文学空間をアメリカとの関係において考察することにある。そのために本稿では、講和直後から60年代初頭に至るまで際立って多くの文学者をアメリカへと招いたロックフェラー財団の交流プログラムを取り上げる。

文化冷戦の強力な担い手としても知られるロックフェラー財団は、講和から50年代を通して民間組織として日米間の文化交流を先導し、日本において多岐にわたる文化事業を展開した。³⁾ その一つとして財団は1953年に文学者を対象として一年間の留学を支援する創作フェローシップ (Creative Fellowship) を新たに始動させ、以後62年までに多くの日本の文学者たちをアメリカへと招いている。講和からおよそ十年の間に、福田恆存 (以下、括弧内は渡米時期/1953年9月) と大岡昇平 (1953年10月) を皮切りに、石井桃子 (1954年8月)、中村光夫 (1955年6月)、阿川弘之 (1955年12月)、小島信夫 (1957年4月)、庄野潤三 (1957年8月)、有吉佐和子 (1959年11月)、安岡章太郎 (1960年11月)、江藤淳 (1962年8月) といった戦後を代表する文学者たちが、この留学プログラムを通して相次いでアメリカへ渡った。⁴⁾ 渡米した文学者の数や滞在期間の長さにおいて、創作フェローシップはまさに、ポスト講和期の日米文化交流を文学の領域で代表する事例と言える。

ところで、財団創作フェローシップによる最後の留学生であった文芸批評家の江藤淳は後年、『自由と禁忌』(1984) のなかでこの留学の体験を振り返り、次のような問いを投げかけている。

小島氏や私のような、あるいは安岡章太郎氏や庄野潤三氏や有吉佐和子氏のような、

Archives, Rockefeller Archive Center (hereafter RAC), Sleepy Hollow, N.Y. ロックフェラー三世の文化交流構想については、松田武『戦後日本におけるアメリカのソフト・パワー——半永久的依存の起源』(岩波書店、2008年)に詳しい。

²⁾ アメリカの対日文化政策に関しては藤田文子「1950年代アメリカの対日文化政策——概観」『津田塾大学紀要』第35号(2003年3月)及び土屋由香『親米日本の構築——アメリカの対日情報・教育政策と日本占領』(明石書店、2009年)を、戦後の日米文化交流においてアメリカの民間財団によるフィランソロビー活動が果たした役割については山田正編『戦後日米関係とフィランソロビー——民間財団が果たした役割、1945～1975年』(ミネルヴァ書房、2008年)を、戦後日本における文化冷戦の諸相については貴志俊彦・土屋由香編『文化冷戦の時代——アメリカとアジア』(国際書院、2009年)、土屋由香・吉見俊哉編『占領する眼・占領する声——CIE/USIS映画とVOAラジオ』(東京大学出版会、2012年)などを参照。

³⁾ 最も代表的な事業としては、国際文化会館の設立や大学におけるアメリカ研究への助成などが挙げられる。ロックフェラー財団の日本における活動については詳しくは松田前掲書、山本前掲書のほか、佐々木豊「ロックフェラー財団と太平洋問題調査会——冷戦初期の巨大財団と民間研究団体の協力/緊張関係」『アメリカ研究』第37号(2003年)、辛島理人「戦後日本の社会科学とアメリカのフィランソロビー——一九五〇～六〇年代における日米反共リベラルの交流とロックフェラー財団」『日本研究』第45集(2012年3月)などを参照。

⁴⁾ このうち、中村光夫は妻の急病のため一月で帰国、江藤淳は財団支援による一年間の留学が終った後、さらにプリンストン大学東洋学科の教員として翌年(1964年)8月まで滞在した。

ロックフェラー財団研究員とは、いったい何だったのだろうか？ これらは後世の批評家や文学史家が、解き明かさなければならない一つの興味深い宿題である。⁵⁾

江藤が1970年代末から占領軍が行った検閲の研究に着手し、それが戦後日本の「閉ざされた言語空間」を創り出し、文化、思想を強く拘束したとして激烈な批判を展開したことは良く知られている。⁶⁾ その同じ時期に、彼がこのようなどこかわだかまりを感じさせる設問を書き記していたことは興味深い。この江藤の問いは、占領が終結した後の文学空間へのアメリカの介入の考察へと誘うことを意図して発せられたものではなかったか。江藤による問題提起以後、占領軍の行った検閲は広く知られるところとなり、その表現の規制が文学に及ぼした影響に関する研究には一定の蓄積が見られる。一方で、これまでの考察は占領期に偏り、占領終結後の日本の文学空間とアメリカとの関わりに眼を向けた研究は少ない。しかし講和以後の日米文化交流計画において、多くの文学者たちがアメリカとの交流の場に身を置いていたことは、ポスト講和期の文学空間が占領期とは異なるかたちでアメリカの強い影響下にあったことを意味するのではないか。その意味で江藤の問いは、彼の意図を離れても、講和後の文学空間をアメリカとの関係性において問う恰好の出発点となると思われるのである。

従来の研究では、江藤淳など個別の作家研究においてこの留学を通じたアメリカ体験が文学及び思想形成の上での大きな転機となったことが指摘されてきたものの、文学者に対する財団の留学支援が注目されたのは比較的近年に至ってのことである。佐藤泉がこれを文学者に広く共有された体験として取り上げ、考察への先鞭をつけた。⁷⁾ 講和の締結と文化交流が一つの繋がりの中で立案された歴史的経緯を踏まえて、冷戦下の文化交流と政治との関連性に思考をめぐらせた佐藤は、江藤の留学体験やその後の批評の軌跡などを考察し、江藤が先の問いに対して示唆した答えとは、「アメリカが我々を招いたのは一種の心理戦」であり、「占領軍の検閲と同様に、われわれはアメリカの操作対象だった」というものであったのであろうとする推論を提示している。⁸⁾

創作フェロウシップに特定した考察としては、梅森直之が冷戦下の日米文化交流の一例として取り上げて紹介を行った。プログラムに関係した重要人物の経歴や財団との関わり、留学した文学者たちの残したアメリカ体験記や小説作品、発言などを丹念な調査に基づいて示し、それらを手がかりとして運用方法などの概要をまとめた基礎的論考である。⁹⁾ なお筆者は、拙論「阿川弘之における原爆の主題とアメリカ」で原爆を主題とした阿川の

⁵⁾ 江藤淳『自由と禁忌』(河出書房新社、1984年)、87頁。

⁶⁾ 江藤淳による検閲批判は、『忘れたことと忘れさせられたこと』(文芸春秋、1979年)、『一九四六年憲法その拘束』(文芸春秋、1980年)、『落葉の掃き寄せ——敗戦・占領・検閲と文学』(文芸春秋、1981年)などの一連の著作で展開され、『閉ざされた言語空間——占領軍の検閲と戦後日本』(文芸春秋、1989年)において最も体系的に提示された。

⁷⁾ 佐藤泉『戦後批評のメタヒストリー——近代を記憶する場』(岩波書店、2005年)収録の「六本木と内灘——象徴闘争としての日米関係」及び第3章「治者」の苦悩——アメリカと江藤淳。

⁸⁾ 同上書、158-60頁。

⁹⁾ 梅森直之「ロックフェラー財団と文学者たち——冷戦下における日米文化交流の諸相」『Intelligence』第14号(2014年3月)。

一連の作品の中に表れる「アメリカ」を考察するなかで創作フェローシップを取り上げて、その諸様相を論じた。¹⁰⁾ 特に、阿川の人選をめぐる財団側の資料からこの文化交流に原爆表現の抑制を導く意図が内在していたことを確認できたことを踏まえて、占領期の検閲が終結した後も「アメリカ」の表象をめぐる攻防が形を変えながら持続したことを鮮明に示す事例として提起している。

これら一連の考察は、講和以後の文学空間の再考へ向けた新たな研究の動向を成しているといえよう。だが創作フェローシップ・プログラムについては未解明の部分が多く、その全体像を知るには財団側が如何なる意図や方針の下に文学者に対する支援を行ったかを明らかにすることが必要と思われる。ニューヨーク市郊外に位置するスリーピーハロー所在のロックフェラー財団文書館 (Rockefeller Archive Center) には、創作フェローシップ・プログラムやそれぞれの文学者の留学に関連する文書・私信類が多数保存されている。その一部は近年の研究¹¹⁾ のなかにも紹介されているが、財団側の資料を用いた実証研究は漸く着手されたばかりといえる。そこで以下においては、財団文書館所蔵の新資料を紐解きながら、この交流プログラムの性格や日米双方の思惑をも含めた諸様相を論じたい。まず前半では、財団の創作フェローシップが如何なるプログラムであったのかを実証的に明らかにすることを課題とする。その上で後半では、財団側の意図をも含めて、この助成プログラムをめぐる日米双方の期待を検証したい。こうした考察は、「ロックフェラー財団研究員とは何か」という江藤の問いかけに、プログラムの実態とそれが持ち得た意味の両面において、さまざまな角度から応答を返すことになるだろう。

1. ロックフェラー財団創作フェローシップ (Creative Fellowship) の実態

創作フェローシップについては、当時財団の人文学部門のディレクターを務めていたチャールズ・B・ファーズ (Charles Burton Fahs) と坂西志保が中心的な役目を果たしたことが知られている。二人の経歴及び人物像については既に詳しく論じた研究があるので、¹²⁾ ここでは簡略に紹介したい。

¹⁰⁾ 拙論「阿川弘之における原爆の主題とアメリカ」『比較文学研究』第98号(東大比較文学会、2013年10月)、82-105頁。拙論「高度成長期における「アメリカ」の文学表象——『抱擁家族』から『成熟と喪失——“母”の崩壊』へ」『日本比較文学会東京支部研究報告』第9号(2012年9月)においてもロックフェラー財団文学者留学制度 (Creative Fellowship) について言及した。

¹¹⁾ 拙論「阿川弘之における原爆の主題とアメリカ」及び Naoyuki Umemori, “Appropriating Defeat: Japan, America, and Eto Jun’s Historical Reconciliations,” in *Inherited Responsibility and Historical Reconciliation in East Asia*, eds. Jun-Hyeok Kwak and Melissa Nobles (London and New York: Routledge, 2013), 123-44.

¹²⁾ ファーズと坂西の経歴及び財団との関わりについては、梅森前掲論文が既に詳しく論じている。ほかにファーズの経歴については、キンバリー・ゲールド・アシザワ「アメリカのフィランソロビーは日本にどう向き合ったのか」山本正編『戦後日米関係とフィランソロビー——民間財団が果たした役割、1945～1975年』(ミネルヴァ書房、2008年)を、坂西志保については横山学による研究「太平洋戦争開戦時の坂西志保と日本送還」『生活文化研究所年報』第20号(2007年)、「坂西志保の不思議——父傳明と桜井農場」『生活文化研究所年報』第23号(2010年)などを参照。

チャールズ・B・ファーズは、エドウィン・ライシャワー (Edwin O. Reischauer)、ヒュー・ボートン (Hugh Borton)、ロバート・ホール (Robert B. Hall) らと並ぶ戦前からの数少ないアメリカの日本研究者の一人で、1934年から36年にかけてロックフェラー財団の助成で京都帝国大学と東京帝国大学に留学した経歴を持つ。戦時中から終戦直後にかけては戦略課報局や国務省などで要職を勤め、1946年にロックフェラー財団から日本関連プログラムの立ち上げのために人文学部門 (Humanities Division) の副ディレクター (assistant director) に抜擢された。1950年には人文学部門のディレクター (director) に着任し、以後61年にライシャワー大使から東京のアメリカ大使館の文化部門の参事官に任命されて財団を転出するまで、人文学部門のディレクターとして日本関連プログラムを統括し、創作フェローシップの計画と運営の主たる責任者を務めた。¹³⁾

一方、ファーズに協力して日本側でプログラムに深く関わったのが坂西志保であった。坂西は1920年代にミシガン大学に学び、米議会図書館の日本部長を務めていたが、太平洋戦争の勃発に伴い交換船で帰国した。戦後は占領下でGHQに勤務した後、参議院外務専門委員やユネスコの日本代表などを歴任し、国際文化会館にも評議員として携わるなど、日米文化交流に知米派として広く関わっている。その傍らで、精力的な文筆活動を通してアメリカの文化・歴史の紹介にも大きな功績を残した。戦後のアメリカ的生活様式の受容を語る際、占領下である1949年から1951年にかけて『朝日新聞』の朝刊に掲載され、大衆的な人気を博したアメリカの漫画『ブロンディ *Blondie*』(チック・ヤング作) が良く取り上げられるが、その翻訳を手掛けたのも坂西である。¹⁴⁾

坂西志保は後年、プログラムの立ち上げの頃を次のように振り返っている。多少長いが、プログラムを語った重要な証言であり、時代の雰囲気良く伝えると思われるので引用する。

為政者が祖国の悲劇と半ば飢餓情態にあった一般国民に対して申し訳ないと詫びていた時代はとっくにすぎて、民主主義の生活を打立てるためにはどうしたらよいかという大きな課題と取組み、前途はまっ暗で途方に暮れていた。その時、ロックフェラー財団の文化部長で、基金の授与を担当していられたチャールズ・B・ファーズ博士が来日された。博士は京都大学に学ばれ、日本語が堪能で、終戦後各年毎に日本を訪れ、私たちが当面している困難な問題をよく知っていられた。そして、戦前口財団が日本の学術団体や大学に援助を、また教授や研究者を海外に留学させて下さったりした例に鑑み、敗戦国の日本で創作活動に従事している人たちを一年の予定で海外に派遣することにしたいといわれた。これをきいて私は飛び上がるほどよろこんだ。当時の日本にとって海外事情を詳細に書いてくれる人たちこそ、ほんとうにそれからの日本の民主主義の手本を示してくれることになると思ったからである。そしてこれは口

¹³⁾ アシザワ前掲論文の77頁及び以下ロックフェラー財団ホームページ掲載の略歴に拠る。
 “Charles Fahs,” The Rockefeller Archive Center, accessed February 7, 2015, <http://www.rockefeller100.org/biography/show/charles-fahs>.

¹⁴⁾ 『坂西志保さん』編集世話人会編『坂西志保さん』(1977年)巻末の略年譜に拠る。坂西の仕事は今日あまり知られていないが、没後に編集されたこの追悼文集に寄せられた回想やその仕事を網羅した略年譜からは、生前の多彩で精力的な活躍ぶりを窺い知ることができる。

財団の作家への奨学金ということになり、期間は一年間、数ヶ月合衆国に滞在するのが望ましいが、別に制限はない。ヨーロッパに行ってもよい。報告その他は一切要求しない。私が候補者を選び、ファーズ博士が面接して最後に決める。大体こんなことで話がまとまり、その第一回に福田恆存さんと大岡昇平さんが選ばれた。¹⁵⁾

軍事占領下での厳しい渡航制限が漸く解除されたとはいえ、まだ外国の身元保証人や資金援助がなければ留学などほとんど適わなかった時代である。財団の提案に対する坂西の反応から、占領終結の翌年から始まった文学者の海外渡航に如何に大きな期待が寄せられたかが推して知られる。坂西がこの留学プログラムに日本の民主主義の実現という望みを託したことや、候補の人選には日米双方が携り、実際の留学が自由度の高いものであったことなども窺われる。

引用文は1959年に上梓された庄野潤三の『ガンビア滞在記』に坂西が寄せた「解説」のなかの一節で、財団による留学支援について一般に知られた凡その輪郭を示すものといつてよく、管見の限りでは、ファーズや坂西が創作フェローシップに関して引用以上の詳しいことを公に語った発言は見当たらない。実際の留学の様子は文学者たちが帰国後に発表した作品などから窺うことができるが、運営側が如何なる意図と方針を以てプログラムを実施したのかは大きな死角となってきた。ところが、ロックフェラー財団文書館には二人がこの留学プログラムについて詳しく述べた文書が残されている。

財団文書館の膨大な資料群のなかでも文学者の留学プログラムを知る上でとりわけ重要な参考文書となるのが、1959年に財団理事会に提出された極秘 (confidential) の報告書「日本文学フェローシップ・プログラム (The Japanese Literary Fellowship Program)」¹⁶⁾ (以下、1959年報告書) である。ファーズと坂西が同プログラムの立ち上げからその経過と成果までをまとめた中間報告書で、末尾に参考人の意見として、庄野潤三を受け入れたオハイオ州ガンビアに基盤を置く文芸批評雑誌『ケニオン・レビュー *Kenyon Review*』誌の編集長で著名な文芸批評家・詩人であるジョン・クロウ・ランサム (John Crowe Ransom) の執筆による意見書が添えられている。庄野の滞りが彼とガンビアの双方にとって如何に有意義であったかを綴ったものである。さらに財団文書館所蔵のファーズの日記¹⁷⁾ は、プログラムの実態を知るためのもう一つの有効な手がかりとなるだろう。日本滞在中の記録から、彼の対日活動に関する考えや人選の様子などを垣間見ることができる。以下、主にこの二つの資料を併せ読むことにより見える創作フェローシップの制度としての実態を、分析を交えながらまとめた。

¹⁵⁾ 坂西志保「解説」庄野潤三『ガンビア滞在記』(みすず書房、2005年)、283-84頁。

¹⁶⁾ The Japanese Literary Fellowship Program: The Rockefeller Foundation Confidential Report for the Information of the Trustees, January, 1959, folder 86, box 2, series 2-Professional papers, Collection 2A44 Charles Burton Fahs Paper, RAC, Sleepy Hollow, N.Y.

¹⁷⁾ Charles B. Fahs Diaries, folder Diary, reel 1-7, box 16, RG 12.1 Officer's Diaries, Charles B. Fahs, Rockefeller Foundation Archives, RAC, Sleepy Hollow, N.Y.

(1) プログラムの計画と運営をめぐる日米の協力

1959年報告書は三人の執筆者による三つの部分で構成されるが、そのうち本文に該当する詳細な報告文の執筆を坂西志保が担当し、ファーズはそれへの「序文」として、報告書の書き手である坂西の略歴とプログラムの概略、フェローの紹介を順に述べている。こうした報告書の構成からも、坂西が創作フェローシップ・プログラムにおいて重大な役割を担ったであろうことが裏付けられるように思われるが、このように留学支援に日米双方が関わったことは特筆すべき点である。まず、この点を確認したい。

ファーズに拠れば、日本の文学者に対する留学支援の企画当初に、財団はそのような試みが望ましいか否かについて慎重に検討を重ねたという。その際に重要な相談役となったのが、ファーズとは旧知の仲であった坂西志保であった。その時の様子を、ファーズは次のように語る。

彼女と私は、海外への渡航が良い影響に劣らず悪い影響を与えるのではないか、また日本における作家たちの比較的優位な地位に鑑みればそもそも本当に支援が必要であるかどうかについて率直に話し合った。そして、日本国内において支援は必要ではないが、とりわけ1930年代から続いた日本の国際社会における孤立に鑑みて、何人かの日本の作家に国際的な経験の機会を与えることは必ず必要であるとのことで意見が一致した。海外渡航によって達成されるべき目標は、別の文化への理解を深めることにより新たに得られる視点を通して、人間の生活や性質に関する作家の認識を広げることにある。¹⁸⁾

先に取り上げた坂西の発言のみを参照すると、財団で決定された支援計画を知らされた坂西が大きな喜びを以てこれを受け入れたようにも読めるのだが、このファーズの報告から、坂西が立ち上げの段階から深く関わった事実が確認される。

さらに続けてファーズは、プログラムに関する彼の助言役として、日米合同の非公式の委員会 (informal committee) が組織されたことを報告している。坂西志保を筆頭として、彼女の推薦を受けて国際文化会館の副理事を務めていたゴードン・ボウルズ (Gordon Bowles) と作家で参議院議員も務めていた山本有三が委員となった。人事における日米の均衡を図ったものと察せられる。報告書には、この委員会の役割と権限が明示的に述べられた。候補の推薦やプログラムの計画に関する三人の助言を受けて、ファーズがこれに縛られることなく研究員の選定を行い、最終的な承認の権限は財団の理事会に委ねられたというのである。¹⁹⁾

以上のことから確認されるように、創作フェローシップは日本側の要望をも踏まえて計画されたもので、財源を提供した財団が最終的な権限は持っていたものの、計画から運営

¹⁸⁾ Charles B. Fahs, 'Introduction,' The Japanese Literary Fellowship Program: The Rockefeller Foundation Confidential Report for the Information of the Trustees, January, 1959, folder 86, box 2, series 2-Professional papers, Collection 2A44 Charles Burton Fahs Paper, RAC, Sleepy Hollow, N.Y., 2. 以下、ロックフェラー財団文書館資料の引用は全て、拙訳に拠る。

¹⁹⁾ Ibid., 2-3.

に至るまで日米の間の密接な協力体制に基づいて進められたプログラムであった。中でも、日本の文学者に必要な支援について坂西と胸襟を開いて話し合ったというファーズの述懐や、ファーズについて「終戦後毎年毎に日本を訪れ、私たちが当面している困難な問題をよく知っていられた」と語った坂西の回想は、二人が共通した認識のもとに深い信頼関係を築いていたことを強く物語る。このような日米間の緊密な協力は、創作フェローシップの実質に大きく反映したと思われる。

(2) フェローの人選

フェローの人選に関しては、これまでに確認してきた坂西とファーズの発言から、坂西が主に候補を推薦し、ファーズが面接の上で選考を行ったことが知られる。さらに梅森は、複数のフェローが坂西から声を掛けられたことを留学の切っ掛けであったと後に述べた事実を挙げて、彼女が人選において要の役目を担ったと分析した上で、「坂西の選考のプロセスについて、かれらフェローは異口同音に、簡潔で実践的な性格を強調している」²⁰⁾と指摘する。

だとすれば坂西は、どのような基準で候補の選定を行っていたのか。フェローたちが如何なる理由と基準から選ばれたかはこれまで明らかにされていなかったが、坂西は人選の上で考慮した幾つかの基準を1959年報告書に示している。第一に、これからの日本の指導を担うことへの期待から、比較的若い世代を主な選考の対象とし、渡航の機会には各々の候補にとって海外体験を十分に吸収し影響を受ける上で最も適した時期に与えられるように考慮された。²¹⁾ 二点目には、候補の資質である。海外生活に上手く適応して滞在を楽しみ、かつその体験を後の創作活動に活かす能力は、候補の備えるべき重要な要件であると考えられた。²²⁾ これらの点に加えて、さらに坂西が人選の過程で直面した困難に触れた次の箇所は、プログラムの置かれた時代の空気を感じさせるものとしてとりわけ興味深い。

いま一つの難しかった点は、候補たちが、自身が共産主義者ではなく、延いてはリベラリストでもないことを証明するための思想テストを通らねばならぬと感じたことである。何人かの候補は、彼らを試すために我々がどのような「踏み絵」を準備するのだろうかと思った。²³⁾

この証言は、冷戦下の文化交流をフェローたちがどのように体験したかについても多くの示唆を与えるが、果して候補の政治的な立場は人選に反映されたか否か。この点について坂西は、「我々は作家たちの思想的傾向を試したり、操作したりする意図はないのだが、

²⁰⁾ 梅森前掲論文、127頁。前掲の『坂西志保さん』に寄せられた追悼文の中で、福田恆存、大岡昇平、石井桃子、庄野潤三、有吉佐和子が坂西志保により推薦を受けたことを留学の契機と語った。

²¹⁾ Shio Sakanishi, 'On Literary Fellowships for Japanese Writers,' The Japanese Literary Fellowship Program: The Rockefeller Foundation Confidential Report for the Information of the Trustees, January, 1959, folder 86, box 2, series 2-Professional papers, Collection 2A44 Charles Burton Fahs Paper, RAC, Sleepy Hollow, N.Y., 17 and 31.

²²⁾ Ibid., 20-21.

²³⁾ Ibid., 20.

他方で、価値ある文学作品が政治的な見解やイデオロギー的なプロパガンダを顕示するようなものでないことは言うまでもないだろう」²⁴⁾との立場を示している。フェローシップの政治への関与を否定しながらも、明かに共産主義の理念に基づく文学を意識したものと読めよう。²⁵⁾

ではファーズは、候補の選考にどのように臨んだのか。報告書には、非公式の委員会から候補の推薦を受けた上での選考過程について、「実際の人選においては、私は委員会の推薦する全ての候補に面談し、候補が日本語で著したものを讀んだ上で選定を行った。また可能な場合には、これに加えて、他の情報源からの助言も参考にした」と具体的な説明がなされている。候補たちの眼に触れない舞台裏で、注意深くフェローの選考が進められたことが分る。ファーズが委員会の三人のみならず、日米両国のさまざまな人物に意見を求めたことは、ファーズ日記の記録や残された書簡などからも重ねて確認できる。他方、ファーズは先の文章に続いて、「しかしそのような二重の確認はいつでも非公式の委員会、なかでも坂西博士が注意深く推薦を行ったことを裏付ける結果となった。事実、結果的に見て、委員会が推薦した候補以外の日本の作家にフェローシップが授与されることはなかった」と記し、坂西の判断力の高さを重ねて強調している。²⁶⁾

ここまで、報告書を参照しながら人選の手順を述べてきたが、人選方式を振り返って何よりも特筆すべき点は、坂西の回想にも「私が候補者を選び、ファーズ博士が面接して最後に決めた」とあるように、作家たちが自ら志願するのではなく、財団側が適切と思われる候補に声を掛けるという方式が取られたことであつたように思われる。これは通常の留学プログラムにおける人選方式とは決定的に異なる。そして渡米した作家たちの多くが、坂西志保から留学を提案されたことが渡米の契機となったと後に語ったことは、創作フェローシップを通したアメリカ体験の意味を考える上で極めて重要な点であろう。そのような財団研究員の文学者たちにとって「アメリカ」とは、こちらから目指したものでなく、向こうからやってくるものとしてあつたといえるのではないか。

そして日本滞在中のファーズの日記の記録に拠れば、実際に奨学金を与えられて渡米した作家たち以外にも、水面下で彼が接触した文学者はさらに広範囲に及んだようである。ファーズは財団に加わった翌年の1947年から毎年日本を訪れて、滞在中の日程を自身の日記に詳しく記しているが、その記録からファーズが候補として面会したものの、助成は行われなかったと断定できる作家には、木下順二、伊藤整、井上靖、吉田健一、竹山道雄らが含まれる。²⁷⁾ このほか、財団内部で暫定的な候補として考慮されたことが確認できる文学者までを含めると、三好十郎、三島由紀夫、草野心平、寺田透、服部達、福田定良、中村真一郎、飯沢匡、大江健三郎、曾野綾子、佐古純一郎、佐伯彰一、村松剛、幸田文、

²⁴⁾ Ibid., 20.

²⁵⁾ 但し、拙論「阿川弘之における原爆の主題とアメリカ」で論じたように、坂西によって言明された原則とは裏腹に、選考において候補の政治的立場が必ずしも排除されたわけではなかったことを指摘しておく。

²⁶⁾ Fahs, 'Introduction,' 3.

²⁷⁾ ファーズ日記の記録によれば、木下順二は1952年5月2日に、伊藤整と井上靖は1953年4月28日に、吉田健一は1956年4月11日、13日、そして翌1957年4月12日に、竹山道雄は1959年4月20日にファーズと面会した。

十和田操といった多数の小説家・批評家の名が見られる。²⁸⁾ こうした作家たちは、さまざまな理由から助成が見送られたり、あるいは逆に文学者の側から財団の提案を辞退したことが確認されるのである。創作フェローシップの人選は、文壇全体を広く射程に収めたものであったというべきであろう。

(3) 留学に対する支援方針

留学にあたりフェローたちに報告その他の義務は一切なく、ヨーロッパへの渡航も許可されたことは既に確認したが、さらに財団の支援方針は具体的にはどのようなものであったのか。1959年報告書のなかでファーズが留学のプログラムの構想について述べた箇所を以下に訳出する。

日本の作家たちのための旅程の計画を組むことが困難を孕むことは初めから分かっていた。ほとんどの場合において、研究員にアメリカだけでなくヨーロッパを旅する機会を与えることは必要であることが合意された。プログラムが純粋なアメリカのプロパガンダであるとの批判を避けるためである。理事会は、作家たちが何をするかを決めるにあたりかなりの自由が許されるべきであるが、その反面、明確な目標なしに旅行することは単なる観光に陥り、海外生活の理解を深め、良い人間関係を形成する上での妨げになると強く感じていた。最初のフェローたちは計画された旅程や管理に疑いの目を向けたが、最近では作家たち自身も一つの場所に長期間滞在することがより実り多い結果をもたらす可能性が高いとの考えに同意している。しかしながら、フェローシップ・プログラムを定型化することは試みていない。むしろ、一人々々に対する支援は、その個人の性質や能力を発展させる上でどのような海外経験が最も有意義であるかを見極めるべき新たな個別の課題であると考えた。²⁹⁾

比較的自由に柔軟といえる財団の方針は、プロパガンダへの批判を注意深く避けながら、且つ最大限の効果を上げることを狙いとしたものであったことが理解される。定型化した日程やプログラムを敢えて避け、文学者それぞれの関心や事情に合わせて個別に対応する財団の方針を受けて、フェローたちは各自が研究のテーマを定めて全米各地のさまざまな地域に出かけ、多様なアメリカ体験をすることになった。大陸を鉄道で横断しながら旅した大岡昇平や、全米各地を廻りながら児童図書館活動や出版事情の見学に励んだ石井桃子、中西部のオハイオ州の小さな町ガンビアに留学先を決めた庄野潤三、プリンストン大学に

²⁸⁾ それぞれ、三好十郎(1951年2月23日)、三島由紀夫(1951年3月2日、1955年5月26日、1957年4月12日)、草野心平(1954年5月1日)、寺田透(1955年5月26日)、服部達(1955年6月12日)、福田定良(1956年4月11日)、中村真一郎(1956年4月11日)、飯沢匡(1957年4月11日)、大江健三郎(1958年4月9日)、曾野綾子(1958年4月20日)、佐古純一郎(1958年4月20日)、佐伯彰一(1958年4月20日)、村松剛(1958年4月20日)、幸田文(1958年4月20日)、十和田操(1958年4月26日)の日付のファーズ日記の記述の中に確認できる。また、1959年の中間報告書によれば、俳優で演出家の芥川比呂志が創作フェローシップの枠で留学が決定したものの、結核により断念せざるを得なかったという。

²⁹⁾ Fahs, 'Introduction,' 3-4.

籍を置いた江藤淳など、その留学体験は一人一人がまるで異なるといえる。³⁰⁾ 一つの場所に長期間留まりながら現地の人々との深い交流を促す財団の方針がフェローたちの異文化体験の質を大きく左右したことは、例えば大岡の旅行記『ザルツブルクの小枝』(1956)と、庄野のアメリカ滞在記『ガンビア滞在記』(1959)を読み比べれば一目瞭然である。

フェローに対する財団の方針が自由や自主性の尊重であったならば、その支援の特質は寛大さあるいは親密さであったともいえるであろう。研究員にはこれといった義務はなく、ただ自由にアメリカを体験することが求められた一方で、財団は渡航と現地での生活、旅行などに必要な経費一切を賄った。また、財団文書館に保管された夥しい量の書簡からは、財団側が財政面での援助に留まらず、滞在を通して留学が意義あるものとなるようにフェローたちに親身に助言を与え、さまざまな人物を紹介して引き合わせるなどの手厚い支援を継続して行ったことが確認される。渡米した文学者たちの多くが帰国後に、留学が有意義なものであったと述べていることは、こうした財団支援の「成果」でもある。³¹⁾ 留学が終了した後にも留学した文学者たちと財団との関係が持続したことも注目される。ファーズの日記には、彼の来日の度に坂西志保や元財団研究員の文学者らが会合し、帰国後の活動や留学プログラムの運営、日本の文学状況などに関して話を交わす件が繰り返し登場する。そうした場面では、帰国した文学者たちからも意見を聞き、新しい候補の推薦を受けることもあった。このような財団とフェローの間の友好関係のみならず、財団を介して文学的にも政治・思想的にも性向の異なる文学者たちが体験を共有し、持続して親交を深めることができたことも興味を引く。

以上が、1959年報告書とファーズの日記の記録から浮かび上がる創作フェローシップの諸様相である。財団は一見、善意と相互尊重に基づく自由な文化の交流を促したように見える。だが、プロパガンダへの批判を回避する意図があったとはいえ、何故財団は自国のみならずヨーロッパへの渡航までも支援する異例の寛大さを以て、このような支援を行ったのか。また、財団が創作フェローシップの計画から運営に至るまで日本側の意見を積極的に反映させ、一人一人の研究員の要望に応じた滞在のプログラムを提供したことは、日本側が決してプログラムの受動的な受け手ではなかったことを意味する。坂西志保をはじめとした日本人がプログラムの計画や実施に大きく関わった限りで、それは日米の共同事業であったといえる。ならば次に検証すべきは、アメリカ側は如何なる思惑を以て日本の文学者への留学支援を行ったのか、そして日本側はどのような考えのもとにこれに協力したかであろう。梅森による先行研究は、「坂西が、ひいてはロックフェラー財団とその背後にあるアメリカ政府が、この時期、何をかれら日本の作家に期待したうえでアメリカに送り込み、また、かれらはいかにその期待に応え、またそれに抵抗したのか」といった諸側面を作家たちの具体的な作品に即して読み解くことを今後の研究課題に挙げている。³²⁾ 本論考では引き続き、財団文書館に残されたさまざまな資料のなかにこのプログラムを支えた日米双方のさまざまな動機や思惑を探ることで、財団研究員が持ち得た意味を考察したい。

³⁰⁾ その他のフェローたちの留学については、梅森前掲論文が簡略にまとめているので参照されたい。

³¹⁾ この点については、拙論「阿川弘之における原爆の主題とアメリカ」でも触れている。

³²⁾ 梅森前掲論文、128頁。

2. ロックフェラー財団創作フェロー (Creative Fellowship) の意味をめぐって

(1) アメリカ側の視点

キンバリー・グールド・アシザワによれば、財団の活動に関する実際の意思決定は各プログラムのディレクターに大きな権限が与えられていた。³³⁾ したがって以下においては、ファーズの対日活動および創作支援に関する考えと財団の活動全体の方向性の双方に目を配りながら、創作フェローシップの背後の文脈をまずアメリカ側の視点に基づいて明らかにしていく。

はじめに、戦後の出発期において財団の対日活動の方向性をファーズがどのように見定めていたかを、占領下に遡って確認しよう。財団は占領中から逸早く戦前の活動の一部を再開し、講和後の本格的な活動に向けて準備を進めていた。1946年に財団の人文科学部門に加わったファーズは翌年からアジア諸国を毎年巡回し、日本ではGHQ/SCAPの関係者や日本の各官庁及び主要大学の関係者を含めた指導者らに数多く面会して占領下の状況やこれから必要とされる財団の支援について話し合った。その視察の結果を踏まえて占領への中間評価と財団の日本での活動に関する方向性を提示したファーズの報告書が、「日本に関する意見及びロックフェラー財団の日本における活動への提案——チャールズ・B・ファーズによる覚書 (Comments on Japan and Suggestions for Rockefeller Foundation Policy There: Memorandum by Charles B. Fahs)」(1948)³⁴⁾である。

ファーズはこの覚書で、対日占領は「表面的には成功、根本では失敗」³⁵⁾であるとの評価を下した。大きな混乱や暴力を伴うことなく占領が遂行され、占領軍兵士たちは日本国民に概ね良好な印象を与えたものの、「日本人の思考と社会組織に深い影響を与えることには成功していない」というのである。³⁶⁾ ファーズによれば、日本の国際政治の基調は「現実主義と感情の混合」で、国際政治におけるアメリカの優位が明白な時には現実主義が優勢を占めるが、もしその地位が揺らげば、占領の失敗は日米双方にとって否定的な結果となって露呈する恐れがあった。³⁷⁾ こうした認識のもとにファーズは、今後望まれる財団の活動の目的を日本の再方向付け (Reorientation) に定め、軍事占領下の再方向付け政策では空白となっていた高等教育の分野に財団が早急に進出すべきであると進言した。³⁸⁾ ファーズの報告書は、言語教育、図書館学、歴史、哲学、文学といった人文科学やその他社会科学の分野で望まれる財団の活動について数多くの提案を行っており、例えば文学の項では、日本の知識人が世界の共同体に適合する上で役立つであろうとの期待から、大学における比較文学の発展に関心が示されていることも興味深い。³⁹⁾ だがなかでもファーズが再方向

³³⁾ アシザワ前掲論文、80頁。

³⁴⁾ Charles B. Fahs, Comments on Japan and Suggestions for Rockefeller Foundation Policy There: Memorandum by Charles B. Fahs, January 26, 1948, folder 22, box 3, series 600, RG 1.2, projects, Rockefeller Foundation Records, RAC, Sleepy Hollow, N.Y.

³⁵⁾ Ibid., 2.

³⁶⁾ Ibid., 1.

³⁷⁾ Ibid., 2.

³⁸⁾ Ibid., 6.

³⁹⁾ Ibid., 10.

付けを補強する重要な手段と位置付けたのが、ほかならぬ留学であった。ファーズは、軍事占領下での日本人の渡航制限が財団活動の妨げとなるとして、GHQと国務省の関係者に制約の撤廃を強く働きかけたことも報告している。⁴⁰⁾ こうした記述に照らせば、財団が後に文学者を含む多くの日本人に対して行った留学支援は、占領下の再方向付け政策の延長としての側面をもつと言えるのではないか。

一方、財団全体の活動方針に目を向けると、50年代に入る頃から財団は冷戦への積極的な関与へと大胆に舵を切った。1951年の財団の年次報告書は、文明が大きな脅威に晒され、世界の人々が「戦争と平和の間」に危うく宙吊りにされた空前の危機的状況に言及し、1950年から51年にかけての時期を、世界の転換期であると同時に財団にとってもプログラムの大々的な見直しの時期にあたると定義した。⁴¹⁾ それは次のような認識に基づいていた。

国際関係がこれほどまでに緊張した今日では、我々は世界の不調和という事実と向き合わなければならない。世界勢力におけるスターリニズムの台頭と大量破壊兵器の発展がなかったより単純な以前の時代よりも一層の慎重さが必要である。組織がその時代に社会の抱える問題を避けることは不可能であるし、望ましいことでもない。象牙の塔にこもる態度は、「鉄のカーテン」の態度と同様に非合理的である。安全保障の必要性和、それを達成することの困難さを認識した上で、国の安全を危機に晒すことなく精神の活力を保つためにはどのような調整が必要だろうか。⁴²⁾

佐々木豊が指摘したように、この時期に財団はまさに、「篤志事業を冷戦下の国際政治状況に適合させ」ていたのである。⁴³⁾

文芸創作への支援計画が浮上したのはこれと時を同じくしていた。文学への支援が検討され始めた初歩的な段階で、ファーズが人文学部門のスタッフの議論の叩き台として準備したと思われる1950年1月の日付のノートが残されている。そのなかでディレクターに就任したばかりのファーズは、次のように記している。

共産主義者は適切に「導かれた」文学は共産主義の発展に役立つ資産になると考えている。さらにある者は、例えば中国において、こうした考えが正しいことが立証されたとも言えるかも知れない。しかしおそらく我々が支援したいと望むのは、こうした類の文学ではないだろう。また、我々はたとい民主主義を擁護するためであっても、そのような「指導」を確立したいとは思わないだろう。なぜならばそれは、手段と目的において危うい矛盾を孕むことになるからだ。⁴⁴⁾

⁴⁰⁾ Ibid., 17.

⁴¹⁾ *The Rockefeller Foundation Annual Report, 1951* (New York: Rockefeller Foundation, 1951), 6-8.

⁴²⁾ Ibid., 9.

⁴³⁾ 佐々木前掲論文、172頁。

⁴⁴⁾ Charles B. Fahs, Notes for Preliminary Discussion by Humanities Staff on Literature and Its Influence, folder 5, box 1, series 911, RG 3.1, administration, program & policy, Rockefeller Foundation Records, RAC, Sleepy Hollow, N.Y., 1.

この文章は、50年代を迎えたばかりの時点で既に、文学領域が財団にとってこれ以上放置しておくことのできない冷戦の重要な戦場の一つとして認識されたこと、そして財団の文芸創作への支援計画が、共産主義への対抗を強く意識したものであったことをはっきりと示す。共産主義革命を文学的課題に掲げた共産陣営の文化攻勢は、当時アジアを中心とした地域において大きな影響力を振るっていたことから、これに早急に対処することが求められていた。しかし同時に注目すべきは、ファーズが「民主主義」の価値の促進という「目的」と、その実現のための「手段」の間の矛盾を強く警戒した点であろう。即ち、財団の文芸創作への支援の動機に文化冷戦が深く関わったことは疑い得ないとしても、プログラムの中身において政治性が強く表れる場面は少なかったであろうことが、この方針からも推測されるのではなかろうか。ファーズはこの覚書で、文学への支援が大きく分けて、「個人の発展」、「健全で活気に満ちた自由な社会の発展」、「国際理解の増進」という三つの局面で「全世界における人類の福祉」の向上という財団の使命に貢献するであろうとの暫定的な見通しを記した。

1951年の財団年次報告書は、「我々の態度や信念、価値評価」の発達に関わるものとして、⁴⁵⁾ 文芸創作 (creative writing)・文学・歴史・哲学・その他の芸術作品への財団の助成が拡大されたと報告した。⁴⁶⁾ 50年代に新たに開始された財団の活動には、文芸作家へのフェローシップとして、アメリカ国内および日本を含めた幾つかの地域に対する対外的な助成が含まれた。⁴⁷⁾ 注目される点は、財団がアメリカにおける作家たちの地位が不安定で支援に対する需要が大きいと判断したこと、文学分野に限っては国内での活動を優先し、対外的な助成は極めて重要な意味が見出せるものに限る方針を明示していたこと、且つ国内でのフェローシップは作家たちの地位を安定させることを直接の目標に掲げていたことである。⁴⁸⁾ 1959年報告書でファーズが、日本の作家の比較的安定した地位に鑑みて国内での支援は必要でないが、「1930年代から長らく続いた日本の国際社会における孤立に鑑みれば、日本の作家に国際的な経験の機会を与えることは必ず必要」であると述べた言葉は、こうした一連の文脈のなかで読まれうるものと推測できる。そして作家たちにアメリカへの留学の機会を与えるという支援方法が、他の地域における文芸創作への助成と比べて例外的なものであったことから、日本の作家に対する支援にはやはり先に見た「再方向付け」との連続性を見出せると考えられる。財団が文学を「我々の態度や信念、価値評価」に関わるものと捉えていたことに照らせば、それはまさに「再方向付け」に最も適した支援分野であったともいえるだろう。

⁴⁵⁾ *The Rockefeller Foundation Annual Report, 1951*, 86.

⁴⁶⁾ *Ibid.*, 76-77.

⁴⁷⁾ 1956年度の財団年次報告書によれば財団は、アメリカを先導する四つの文芸評論誌『ケニオン・レビュー *The Kenyon Review*』『セワニー・レビュー *The Sewanee Review*』『パルチザン・レビュー *The Partisan Review*』『ハドソン・レビュー *The Hudson Review*』を通して、国内の作家へのフェローシップを提供していた。また、対外的な助成として、バーミンガム大学 (University of Birmingham) を通した第二次世界大戦後のイギリスの作家たちへの支援 (Atlantic Awards)、1951年からのメキシコの若手の作家たちに対する助成 (Mexico City Creative Writing Project)、1956年のカナダ財団 (Canadian Foundation) への助成を通したカナダの作家たちに対するフェローシップの授与を行ったことを財団文書館の諸資料から確認できた。

⁴⁸⁾ *The Rockefeller Foundation Annual Report, 1956* (New York: Rockefeller Foundation, 1956), 61-63.

以上のことから、日本の作家に対する創作支援は、再方向付けの占領政策の延長線上に位置づけられると同時に、冷戦下における共産陣営の文化攻勢に文学の領域で対抗したものと推定できる。そして冷戦下の文化攻勢に動機づけられながら、自由な精神の擁護という目的とそのための手段との間の矛盾の回避を目指した創作フェローシップは、両義的な可能性をもつものであったように思われる。

(2) 日本側の視点

次に、非公式の委員としてプログラム運用の重要な一翼を担った坂西志保や山本有三をはじめとして、日本側の創作フェローシップに対する考えに眼を向けてみよう。

坂西が研究員たちに、海外事情の紹介を通して日本の「民主主義」の実現に重要な役目を果たすことを期待したことは先に確認したが、さらに財団理事会に提出した1959年の報告書で坂西は、西洋の強い影響のもとでの日本近代文学の歩みを振り返り、日本文学の置かれた現状に照らして、作家への渡米支援を行うことの意義を強調した。報告書は日本の近代文学史を西洋との関わりを軸に詳しく論述しているが、紙幅の関係上ここでは、坂西が日本の文学状況をどのように見据えていたかに焦点を絞って紹介したい。報告書で坂西は、西洋との接触により近代化が至上命題となった明治以来の日本において、作家たちは「生き残るために自らの伝統を捨てて、西洋文化の摂取の上に文学を築かねばならなかった」と述べて、その結果、伝統的文脈と強く結びついた大衆と文学の間に遊離が生じたことを、日本の文学の抱える一つの問題として指摘した。⁴⁹⁾ だが坂西の眼にさらに大きな問題として映ったのは、西欧の近代精神が作家たちに依然として十分に吸収されていないことであった。坂西は、日本の作家たちの置かれた精神状況を、絹の着物と紋付袴に西洋風の靴を身につけて銀座通りを歩く人の姿に喩えて、次のように述べている。

東京のフィフス・アベニューといえる銀座通りで時折、紋付袴を着て頭にはステッソン帽を被り、靴を履いた人を見かけることがある。(…)最も近代化された文士すら頭と足もとのみが近代化され、体には未だ古い封建制の服を身に纏っていることが珍しくない。(…)これは我々にとっては深刻な問題である。平和時で、生活が正常を保っているときには、借り物の衣装は作家たちが立派な作品を書くことを妨げないであろう。しかし危機に際して彼らは困惑に陥りやすい。軍国主義の時代であった30年代と40年代、大きな価値のある文学はほとんど書かれていない。⁵⁰⁾

つまり坂西は、作家たちの西洋精神の摂取が未だ皮相な水準に留まっていることが文学の脆弱化を招いていると考え、創作フェローシップを通してアメリカに身を置いた作家たちが西欧の精神を身につけ、それを創作に活かすことで、戦後の近代化の支えとなることに期待をかけたのである。創作フェローシップの継続を促した坂西の中間報告書は、作家の渡米支援に対する日本側の需要を雄弁に語るものとなっている。

ところで、このように支援の必要性を訴えるとき、同時に彼女が、冷戦下における共産

⁴⁹⁾ Sakanishi, 'On Literary Fellowships for Japanese Writers,' 15-16.

⁵⁰⁾ Ibid., 17.

主義圏の文化攻勢を明確に意識していたことは明らかである。坂西は先の引用に続いて、「日本の作家がヨーロッパの伝統を吸収するにあたっては数え切れぬほど多くの障害があり、それらを克服するための積極的な努力はほとんどなされていない」との認識を述べ、戦後の文学者たちの海外渡航状況に次のように言及している。当時の文壇状況を同時代の視点から伝える貴重な証言でもあるので、やや長くなるが以下に訳出したい。

ロックフェラー財団フェローシップを授与された作家たちのほかにも、戦後には何人かの作家たちが海外に渡航した。日本ペンクラブの会長である川端康成は、国際会議の東京への誘致のためにパリに三週間滞在した。大佛次郎は、アメリカの出版社から招きを受けた。『潮騒』の著者三島由紀夫は、アメリカと南米を二度訪れた。最近では、円地文子と平林たい子がアジア・ファウンデーションの支援を得てアメリカとヨーロッパを廻り、放浪作家の檀一雄が同じプログラムで現在海外に出ている。批評家で後に財団フェローになった木庭一郎〔中村光夫：引用者注〕は、作家のなかでは唯一ユネスコのフェローシップを授与された。しかし、これらは概して観光旅行とさほど変らないものである。こうした旅行を軽視するわけではない。視野を広げるのに確かに役立つからである。しかしそれらは、優れたものの場合でも、ソ連や中国のそれぞれの政府の支援によってなされる「文化使節」と呼ばれる団体旅行とせいぜい大差のないものである。これらが、意味のある効果を持たないことは、誰もが断言できるであろう。使節団のほとんどを左翼シンパが占め、一、二人のオールド・リベラリストたちが権威づけのために加えられる。帰国後は公会堂で大きな集会が開かれ、使節団の報告を熱狂的な聴衆が歓声を上げて迎える。「オールド・リベラリスト」たちはロシアや中国に市民の自由があるかについて長広舌を振るうが、その実誰にも、彼らが招聘された国に対して賛成なのか反対なのかははっきりしない。それでも支援団体は完全に満足し、次の使節団を送り出す計画を立てる。⁵¹⁾

自由陣営対共産陣営の間の対立が、文学者に対する渡航支援の形で先鋭化していたことを鮮明に物語る文章である。引用文に言及された作家たち以外にも、講和後にはフルブライト基金や国際文化会館主宰の日米知的交流計画など、官民合わせてさまざまな人的交流制度が拡充され、自由主義諸国への渡航を後押ししていた。⁵²⁾ 戦後のベストセラーの一つとなった小田実のアメリカ旅行記『何でも見てやろう』(1961)がフルブライト基金による留学から生まれたことは良く知られた一例である。対する共産陣営側も、競うようにして文学者たちを招いていた。時代は文化冷戦の真っ只中で、文学者たちをその戦場へと招いたのである。だが坂西によれば、このように海外への渡航の機会が増えたことは、直ちに作家たちがそれらの文化への理解を深めることに繋がるものではなかった。先に引用した文

⁵¹⁾ Ibid., 18.

⁵²⁾ フルブライト基金による留学については、例えば近藤健『もうひとつの日米関係——フルブライト教育交流の四十年』(ジャパントイムズ、1992年)を参照。日米知的交流計画については、国際文化会館『国際文化会館10年の歩み——1952年4月1962年3月』(国際文化会館、1963年)のほか、藤田文子「『日米知的交流計画』と1950年代日米関係」『東京大学アメリカン・スタディーズ』第5号(2000年3月)に詳しい。

章に続いて坂西は、「このような使節団の不毛さを目の当たりにしたこともあり、我々のうちの一部は、作家たちに短期の旅ではなく、地域にコミュニティの一員として定着できるだけの期間滞在する機会を与えることが望ましいと考えるようになった」と記している。⁵³⁾ 即ち、フェローたちが異文化を表面的に体験するのではなくその体験から深く影響を受けることを企図した創作フェローシップは、他の交流プログラムとは一線を画すものとして構想されたのであり、それは文化冷戦への明確な介入でもあった。

共産主義への対抗意識は、さらに坂西とともに創作フェローシップに関する非公式の日本側委員を務めた山本有三にも分かたれていた。ファーズ日記の記録に拠れば、1952年4月に日本訪問中のファーズに面会した山本は、日本の文学は私小説が多く、その視野が狭いとして、作家たちは「社会と国際政治に関する認識を拡げるため」に海外体験が必要であるとファーズに訴えた。その際にファーズから研究員の滞在先をアメリカのみに限定しない財団の方針を聞かされた山本は、アメリカとヨーロッパでの半年ずつの滞在が最も理想的であると意見を述べてその提案に賛同し、さらに「日本の作家たちはフランス文学に強い関心を持っているだけでなく、ロシアの強い影響圏にありながら共産主義者を排除しているフィンランドの文学にも興味を持っている」と付け加えたという。⁵⁴⁾ その言葉には、坂西よりも一層強い反共意識がこめられたようにも見える。

ではこのような企ては、同時代の日本の文壇にどのように受け入れられたのか。留学プログラムの構想が知られると、文学者の間に広く相反する反応を引き起こした。例えば文壇の重鎮である谷崎潤一郎は、「西洋のことになると我々は、軽蔑するか崇拜するかの二つの態度しか持たぬ。東洋と西洋の間に調和はなく、両者を調和させるための努力すらない。それぞれが二つの独立した世界としてあるのだ。西洋の文化を肌で感じ、そのなかで呼吸することによってのみ、両者の間の調和をもたらしすることができる」と述べて賛同し、志賀直哉と武者小路実篤もこの意見を支持した。⁵⁵⁾ 他方、プログラムが開始されたのは折しも占領終結直後の日本の反米感情が大きな高まりを見せた時期でもあり、文学者のアメリカへの招聘という構想に対しては反発の声も強く上った。坂西は報告書で、石川達三、平林たい子、平野謙らが創作フェローシップをアメリカによる洗脳であると激しく批難したことに触れ、「幸いにもそのような批判を真剣に受け止める人はいなかった」ばかりか、左翼陣営側の知識人からも自省の声が上ったと記している。⁵⁶⁾ しかし逆風の強かったことは、例えば大岡昇平が「ロックフェラー財団の奨学資金を受けたので、或る進歩的評論家は「大岡は戦争の俘虜になっただけでは飽き足らず、こんどはアメリカの文化的俘虜を志願した」と批難した」⁵⁷⁾と述べた言葉からも推して知られる。

以上、日米双方の側から創作フェローシップをめぐる思惑を追ってきたが、これまでの

⁵³⁾ Ibid., 19.

⁵⁴⁾ Charles B. Fahs Diaries, April 15, 1952, folder Diary, Trip to the Far East, April 5-June 6, 1952, reel 3, box 16, record group 12.1 Officer's Diaries, Charles B. Fahs, Rockefeller Foundation Archives, RAC, Sleepy Hollow, N.Y.

⁵⁵⁾ Sakanishi, 'On Literary Fellowships for Japanese Writers,' 19-20.

⁵⁶⁾ Ibid., 20.

⁵⁷⁾ 大岡昇平『ザルツブルクの小枝——アメリカ・ヨーロッパ紀行』（中央公論社、1981年）、8頁。

議論を踏まえて財団研究員の意味に関する江藤に問いに答えるならば、創作フェローシップは日米の反共リベラルが手を結んで親米反共の路線に基づく日本の近代化の推進を目指す企図が、文学への介入として顕われたものと言えよう。坂西や山本は、ネイティブ・インフォーマントの役割を引き受けながら、文学者の滞米支援をアメリカ側へ積極的に働きかけた。しかしこのような交流の企ては、日本の知識人の間に対立を顕在化させる契機にもなった。とりわけ創作フェローシップが開始された占領終結直後は、占領から脱却した日本が占領下でのさまざまな改革を振り返りながら戦後の第二の近代化の道筋をさまざまに模索していた時期であり、近代化の方向性をめぐる問題意識は、例えば51年頃から文壇を賑わせた国民文学論争に象徴されるように、文学においても先鋭化していた。このような50年代の日本の文化状況のなかにあって、財団の留学支援計画をめぐって賛否両論の立場から巻き起こった波紋は、この交流プログラムが冷戦下の両陣営間の対立への介入であると同時に、より大きくは日本の近代化の進路への介入であったことを如実に示している。

むすびにかえて

本稿を通して、講和から60年代の初めにかけて日本の文学者に対する渡米支援を行ったロックフェラー財団の創作フェローシップを取り上げて、その制度としての諸側面にさまざまな角度から光を当ててきた。これまでの考察を踏まえながら、創作フェローシップを視座としたときに、ポスト講和期の文学空間はどのように浮かび上がるのか。

文学者たちを招いてアメリカの文化を深く体験させた創作フェローシップは、アメリカによる冷戦下の文化的攻勢がポスト講和期の文学空間に奥深く入り込んでいたことを示すものである。従来、戦後の日本の文学領域へのアメリカの介入は専ら占領期の検閲を焦点として論じられてきたが、このように講和以後にもアメリカが引き続き文化の交流を通じて日本の文学者に強く働きかけたことは、特に戦後のアメリカをめぐる文学言説を考える上で示唆するところが大きい。

1950年代のアメリカの対日文化政策の展開を考察した藤田文子は、講和を節目として「占領期には日本の教育、報道、文化活動などをほとんど一方的に統制することができたが、占領後は、日本の独立と自主性を尊重しながら、どのようにして日本の共産化を阻止し、自由陣営にとどめおくかが、大きな課題となった」(強調点引用者)⁵⁸⁾と指摘している。このような介入形態の変容は、文学領域にも見受けられるのではないか。検閲が文学表現の規制を通した上から下への「指導」であったのに対して、財団の交流プログラムは日本側の要望に寄り添い、できる限りフェローたちの自由を尊重しながら交流を支援することで、文学者たちにアメリカとの親密な友好関係の形成を促したことに特徴があった。その意味で、創作フェローシップはまさしく、講和後の対日文化政策の基調をそのまま体現したものといえるであろう。即ち、戦後の日本においてアメリカが自己の表象に介入する場は、占領者に対する被占領者から冷戦下の同盟国へと変化した日本の地位に照応して、検閲から文化交流へと移行したともいえよう。

⁵⁸⁾ 藤田「1950年代アメリカの対日文化政策——概観」、2頁。

では、このように日米関係が再編される中で、文学者たちが体験したアメリカとの交流は、戦後日本の文学空間に何をもたらしたのか。その考察は、創作フェローシップによって拓かれたテキスト空間に即してなされるべきであろう。坂西が作家たちに期待したとおり、財団の支援で渡米した文学者たちは帰国後に作品のなかでさまざまにアメリカを描いた。それぞれの文学者にとってアメリカでの滞在が如何に体験され、それが創作の上に何をもたらしたのか、また延いてはそうした文学的言説が戦後の日米関係やアメリカ文化の受容においてどのような役割を果すことになったのか。こうした諸側面については、稿を改めて考察したい。